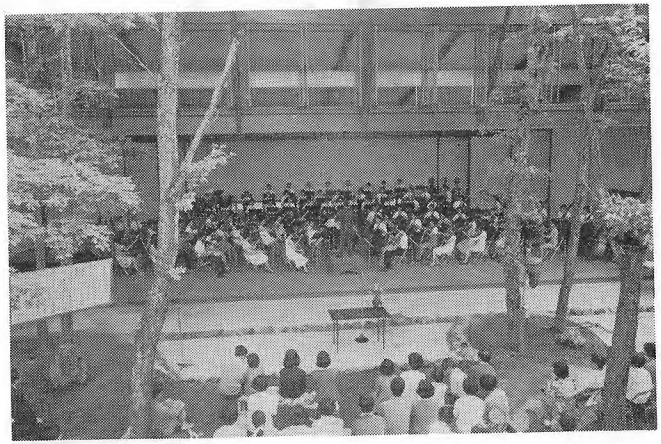
神「山の音楽堂」を完成し給えり

田　中　テ　ル



昭和43年8月14日　大ホール完成祝賀の日

神「山の音楽堂」を完成し給えり

田　中　テ　ル

「主が家を建てるのでなければ建てる者の働きはむなしい」　詩篇一二七篇

❀

〝北軽井沢ミュージックホール〟の名称はようやく音楽学生・音楽愛好者その他の方々にも親しまれるものとなりました。今を去る十二年程前になりますが、ヴァイオリンの勉強で、アメリカに留学している息子を持つ私の頭にふと、日本にも欧米各地にある大自然の中の音楽施設（サマースクールオヴミュージック）がありましたなら、せめて夏だけでも都会の塵埃を避けて、清らかな空気の高原で音楽の勉強が出来ますのに、という考えが浮かび、その〝山の音楽堂〟が頭の中でおぼろげながら出来上がってしまいました。

夏も終ろうとする或る日、息子の恩師・斎藤秀雄先生の別荘を訪れたのでした。先生が弟子の学生さんといとも楽しそうに無心で語り合って居られるお姿を拝見しました。私は「先生、息子の所へ行って参りました」とまず御挨拶し、それから思い切って話を切り出しました。

「日本にもアメリカのように、夏に音楽学生が誰にも気兼ねなく、存分に練習の出来る、安価な施設が欲しいですね。実は、私共にあのバスターミナルのごく近くの林が与えられましたので、そこになるだけ木立ちを残して建築しましたら如何でしょう、とそんな事を考えてみたのですが。勿論、土地は喜んで提供させて頂きたいのです。」と末だ夫にも相談しないうちに独断でこう申し上げてしまったのでした。

先生はニコニコとなさって、「僕も実は、この別荘を売ってもっと広い所を買って建てたいと兼ねがね思っていたんだが……。今迄、子供達は小学校の床板の上にゴザを敷き毛布を各自が持って来て、それにくるまって寝ての合宿ですからね。可哀想だといつも思っているんですよ。田中さんがその気なら僕が設計をして上げよう。僕の親友で芸術的センスのある建築士が居ますよ。その人に頼めばきっと喜んで引き受けてくれるでしょう。」と申され、嬉しそうな輝いた目なざしで、あたりを眺めまわされました。

さてその暮の事でした。先生のお宅で学生さんの為のパーティを開いて下さったとき、私にも是非来るようにと申され伺いますと、驚いたことには、もう早速北軽井沢の別荘に伺った時のお言葉通り、設計を親友の方に頼まれて〝幻の音楽堂〟は正に現実のものとなって、数枚の

製図と外観の絵迄になっており、「御主人に見せて、もし良かったらよく話し合いましょう」と申され、図面を手渡して下さいました。私は実はまだそう早急に建てる話迄はして居りませんでしたので、これはどういう事になるかしら、また我が家の〝名物の夫婦ゲンカ〟になる可能性充分ありと思いつつ、しかし主が必ず助けて下さると信じ祈りつつ、家に戻りました。夫に、勇気を出して「斎藤先生はこんな製図をもう作って下さいましたよ、素敵ですよ。私達だけであの広い土地に別荘を建てても夏何日も行って居られるわけではないし、この際少しでも音楽学生の為に役立てましょうよ。泰興はアメリカで、夏になるとノーフォーク（エール大学のサマースクール）のあのように涼しい、素晴らしい所に連れて行って頂いているのですから、他の方にもその恵みを少しでもお分けしなければ、バチが当たりけすよ。」と半ば強制的な口調で、熱意を持って話してみました。一瞬息をのんで夫は、案の上半分ならよいが、全部はダメだよとそっけない返事なのです。まあ半分ならという気持ちがあるなら、そのうち全部も、という気持ちになるよう神さまにお祈りすれば、きっとそうなると信じて安心さえしました。夫はまた、「バスターミナルからも二、三分だから車を持たない学生にも好都合だし、斎藤先生がそんなに乗り気なら、一つ本腰を入れて実行に移していこう」と製図をまじまじと見つめ、

突如「ようし善は急げだ。斎藤先生にお目にかかり、細かい事を打ち合わせしよう。」と言われたとき、私は思わず胸をなでおろし「主よ感謝」と心の中で叫び、その夜は神に深く感謝の祈りを捧げたのでした。何分お金が必要な事だけに、夫に反対されては全くお手挙げだったからです。

それからこの話は急テンポで進み、先生の親友である佐藤社長は「初め手付金など無くても、日本で初めての大自然の中の音楽施設というそのような建物なら協力しましょう。」と暖かい同情ある言葉を申されて、この建築にとりかかって下さいました。そこで先生は「これを完成させる為には発起人を何名か選ばなくてはならないので田中さんの方でも考えておいて下さい、僕も何名か選んでみるから」と申され、何回となく先生との打ち合わせに夫と共に先生のお部屋に伺って、その御指示を仰いで事を運んでいきました。それは斎藤先生は、日本の音楽演奏家の水準を戦後世界的水準に迄引き上げた巨匠であられ、しかも名誉を顧みられず、また息子の恩師でしたからです。一寸お目にかかっただけですと神経質そうな、そして短気なお坊チャン育ちのワンマン先生と思われ勝ちで、恐い先生とされていました。しかし弟子となって親しく先生から御指導を受けられた学生は、口を揃えて、慈父のような暖かさに敬服すると申して

居りました。そのようなお人柄の陰に、熱心なクリスチャンの御母堂が居られた事を伺いましたとき私は二人の子供に与えた影響は、と反省させられ詫びたい気持ちでした。

❀ ❀

私共雑布のような夫婦は、ただひたすらこの施設建設の為に、皆様の手足となって働かせて頂き、僅かな財も労も惜しむことなく、ただ喜んで情熱を燃やし、西へ東へと走り廻ったのでした。また北は北海道から南は九州まで、音楽関係者のもとに手書きでの募金お願いの手紙を書き送りました。アメリカの〝ロックフェラー財団〟にまでもお願いの手紙を書き、その数は何千通か数え切れぬ程で大きな洋服箱一杯に詰めた手紙を何回郵便局に運んだことでしょう。夫も私も右の親指が痛くて動かなくなる程に書きまくったのでした。またこの為に斎藤先生の弟子のお母様方数名が助けて下さいました。しかし手紙によって送金して下さった方はほんの僅かなものでした。そこで私は何故かを静かに考えてみましたとき「その筈だ」と気付かされたのでした。「こんなに良い事をするのだから、日本で初めての施設なのだから、そして私共

はこんなに一生懸命しかも手書きで真心こめて書き送っているのだから……」と自分勝手な誇りさえ持って、自分の力で募金をしようとする心の傲慢さに、神さまは全く手を差し伸べては下さらなかったのも当然である、と解らされましたことは感謝なことでした。

それからはただひたすらに祈りました。「主よ、どうかこの施設の為に必要なお金を与えて下さい。私は集まる音楽学生達に、神さまからお預りしていますみことばの種を蒔かせて頂きたいのです。」と朝夕の祈りの内に一心にお願いしました。実は、私共にはこの施設建設に情熱を燃やすもう一つの理由があったのです。それは私共で聖書を学ぶ家庭集会を、五年間毎週木曜日にさせて頂けたことの延長の場として、という思いがあったのです。家庭集会は大体十人前後で、老人・主婦・大学生などでこの中から三人の若い男女がみことばを受け入れて主の者となりました。

今度この施設ができますれば、百名位の学生が一度に集うことになり、この場においてみことばの種を蒔きたい、という強い思いが与えられていたのです。そしてたった一人の学生でも主を受け入れるなら、天国のオーケストラは、地上のオーケストラとは比べられない、輝やかしい音楽をかなでると思ったからなのです。そうは申しても、一つの事業の完成を見る迄には

誰しもが通りますように、全く行詰まり、果ては落胆と失望にもうダメだ、と思わされるときもしばしばで、神さまは多くの試練をお与えになりました。

しかし私共は、全智全能の神さまが共に居られることを信じて、夜を徹しての祈りも幾度でしたでしょう。その度に、私はまた自分が先に出てしまって、行詰まっては失望落胆していることに気付かされ、そんな自分に全く愛想が尽きてしまいました。けれどもそんな私故に、あわれんで下さる神さまだ、と解りただただ感謝しました。

それから間もなく、私共の祈りに答えて下さった神さまは、次々と吉報をもたらして下さり、小口ながら友人・親戚と続々寄付金が送り届けられ、また大口の協力者亀田夫人を備えて下さって、御主人と共に資金集めに奔走して下さり、多額の寄付金を集めていただけたのです。

一方その年の九月十四日には、堤剛・弘中孝・久保陽子という若手演奏家と成城合唱団とによるコンサートを開催することが出来て収益を得、また翌年の暮には小沢征爾氏の指揮によるコンサートも実現いたしました。これは氏の御母堂の並々ならぬ御尽力によったもので、成城大学と立教大学とのアマチュア学生オーケストラを用いてのコンサートでした。征爾氏が、このようなアマ・オケを指揮されることは、想像できないことでしたのに、彼の暖かい同情から、

純粋な学生の心を汲んで親が子をいたわるようにして、聴く者を感動させる程の演奏をさせて下さって大成功をもたらしたのでした。

神さまの御計画は全く素晴らしく、不可能と思われた事もすらすらと運んで、人の思いをはるかに越えて、いつも弱い所にお働き下さることを、しみじみと知らされました。

二度のコンサートで、当時のお金で百万円近くの収入があり、本当に感謝いっぱいでした。私共はいよいよ神にすがりつつ、建設の為に奉仕させて頂かなければ、と神の御愛の絶大さ暖かさに感泣したのでした。けれども、周囲の多くの人々はあの当時、養老院とか障害者の方の施設と違って、贅沢なものであるという見解にとどまっていたのでした。そのようなとき、私はいつも「神もし味方ならば誰か我に敵せんや」のみことばに励まされ、勇気付けられ、希望を持って前進することが出来ました。また、親しい友から「祈ってばかりでは駄目よ、やはり財界の有力者名簿を作って寄付を募っては？」と親切な提案も戴き、そうすべきなのかしらとも思いましたが、また「神は全智全能でいらっしゃるのだから、世の財閥とは比ぶべくもない程に富んでおられる方なのだから……」と自分に言い聞かせるのでした。私のなすべき事は、使い走りの小僧さん役に徹することだと考え、東京と北軽井沢の間を往復するドライヴも楽し

く、喜びと幸いでいっぱいでした。そして〝幻の音楽堂〟がいつも頭の中に浮かんで、そこを使用する音楽学生達の喜ぶ顔がチラついてくるのでした。

けれども、神はいつも楽しいドライヴばかりを続けさせては下さいませんで、途中ブレーキの効かなくなった車を八時間程かかって、のろのろとノンストップで、信号機に合わせての運転は真剣そのものでしたが、その長かった道程を事故もなく帰宅させてもらえたのは、まぎれもなく主御自身が、このように困ったときに共に運転して下さった事と知らされて、感謝で疲れも吹きとぶ程でした。

❀❀❀

いよいよ建築にとりかかることを許され、〝山の音楽堂〟の名にふさわしく最少限度に木立が切り倒されました。それからは速やかに、片流れ屋根の分奏室四室・管理人室・応接室・調理室・浴室と八室の棟上げとなり、ささやかな祝いのむしろが敷かれました。このとき、「ああ神はやっぱり生きて働いて下さるお方」の実感をしみじみ胸深く感じ、感謝と喜びでいっぱ

いよいよ三十一日の祝賀式という日の朝には、四時起きをして、娘と二人で現地北軽井沢に向けてドライヴ。心も軽く讃美歌を歌いつつ馳せ参じますと、もうすっかり見事に出来上がって居りました。現地建築士の植原氏は、徹夜の仕上げにも疲れを見せないで、自らの手でニコニコしながら箒の縞目も鮮やかに掃き清めて居られました。一週間程前に参りましたときには、周りの板張りさえまだでしたので、もし完成が間に合わなかったら、もう県庁、役場みんなに案内状を出してしまったのだからどうしましょう、と一抹の不安を持って帰京したのでした。一瞬、あの木立の多かった林がこのような姿になったことを、夢ではないかしら、と疑った程の感動を覚えました。

神の御計画は、いつも完成に迄至らせて下さるのですから、途中で心配して自分の思いにとらわれた私自身を、何んと信仰薄き者よと恥じ入りました。

私は先ず管理人部屋に入り、青畳の香りに吹い寄せられて座りこんでみたり、浴室の檜風呂の中をのぞき込んでみたりしました。応接室には、堀内敬三先生より贈られた美しい置時計、また三菱電気社長より寄贈されたテレビ、古いながらも応接セットまで備えられて何んとか格好がついていました。各分奏室には、井口愛子先生の寄贈されたアップライトピアノが据えら

れておりました。内装は佐藤氏の芸術的センスで、素朴な中にも音楽を勉強するのにふさわしい、栗色の柱が純白の壁とよく調和しており、天井は太い丸太木が、いかにも山小屋風の暖かい味のある落ち付いたもので、高い天井は音を適当に吸い込んでくれて、ハネ返りのない心地良いレッスンも出来るというものです。その四つの分奏室はA・B・C・D室と呼ぶことにされ、応接室はS室と名付けられました。

前日より泊り込んでいた夫は、プログラムを書いたり祝賀式の準備をしていました。発起人となって下さった振吉氏、二宮夫人そして小沢征爾氏の御母堂、ヴァイオリンの黒柳先生御夫妻も東京から御来山下さって、色々と助けて下さり、皆んなで式の準備を整えました。

昭和四十二年七月三十一日は、このような施設の最少限度のものとして、記念すべき第一期工事完成の日となりました。この祝賀式には約三十名の方々が参列して下さり、毎日新聞の方も取材に来られました。

初めに佐藤氏の祝詞、次に斎藤先生の感謝の言葉、続いて町役場の方々の祝詞が述べられ、米国人宣教師アスキュー先生は祝詞の中で、この場が神に祝福されますようにと祈って下さいました。式後のささやかな祝会では、二宮夕美さんのヴァイオリン演奏を初めにお聴き頂き、

いとなりました。

やがて七月三十一日に完成祝賀の日、という予定日を目前にして、ここでまた一つの難題にぶつかりました。それは完成祝いの日迄に、どうしても財団法人の許可を頂かなければならない事でした。それ迄夫と私と替わるがわる、何回となく嘆願に参りましたが、県庁側としてはいい加減には財団を許可出来ぬ、ということなのです。埋由として、夏二ケ月しか使用出来ぬ大きな施設が、どうして維持出来るのかという経営面において、また土壇場になって「〝ミュージックサマースクール〟という名称では一年中スクールの名のもとに先生が居らなくてはいけないのですよ。」という耳新らしいことを言われ、また「名称を今決めないと三十一日迄には日がないから間に合いませんよ。」と迫られました。とっさに私は「では北軽井沢ミュージックホールでは如何でしょうか」と申しますと、「ホールねェ、〝ミュージックホール〟というのは教育の場としてはかんばしくないね。」と一般的に個有名詞で用いられる方を想像されたらしいのです。そこでまた私は「東京では〝イイノホール〟、〝上野の大ホール〟というふうに皆、音楽演奏会場の建物を〝ホール〟と呼ぶのですよ。東京にいらしてお調べになってみて下さいませんか？」と申しましたら、県庁の方々の中には、勿論それ等のホールのあること

をご存知の方も居られて、やっと「ではそれでよいでしょう」ということになって、現在の名称になった訳なのです。

兎に角、財団法人の許可を頂きたいと懸命に願う私共夫婦は、あせりにあせって居りました。何故なら財団法人の許可を頂かないと、税金の対象となりますし、公けに寄付を募ることも出来ないのです。斎藤先生からも「財団の許可がもらえたらすぐ、三百万円を寄付しますよ、田中さん」と暖かいお言葉をいただいていましたので、必死になって、県庁に嘆願しなければならなかったのでした。

ここで私共は、また心配の余りに、度々県庁に電話をして問い合わせたり、主よりも自分が先に立って頑張ってしまいました。ところが、「何故自分達の力だけで許可されると思うのか」と示されて思わず、「ああ主よ赦して下さい。神さまの御心でしたら完成の日迄に許可して下さい」と祈らされました翌日、県庁から電話がきて「二十八日に〝財団法人・北軽井沢ミュージックホール〟として交付する」旨の知らせを頂きました。その時の嬉しさと喜びは、咽に詰まっていた物が取れたような思いで、歓声を張りあげてしまいました。そしてすぐに自分達の努力で事を成そうとする私自身を、神の前に悔い改めたのでした。

また藤原浜雄さんのヴァイオリンの響く中、サンドイッチとジュースで祝いの会食をいたしました。誰の顔にも完成を迎えての喜びがあふれており、私はその様子をパチパチと写真に撮ることで動き回りました。それは胸が一杯で、何も話すことが出来なかったからなのです。

その夜、東京からいらして下さった十数名の方々が、分奏室のじゅうたんの上に蒲団を敷いて、まるで修学旅行の学生さんのように枕を並べて、お休み下さいました。私はS室で独りベッドについたとき、ささやかながら完成祝をさせて下さった神さまの恵みに、一しお胸つまる思いで、感謝の祈りを捧げました。それから、祝会後に斎藤先生がニコニコとして「田中さん、僕は東京へ帰ったら三百万円をすぐ寄付するから取りに来て下さい」と申されたあの時の胸踊るおもいの一瞬、また「よく財団を許可してもらえましたね。御苦労さまでした」と初めて先生からのおほめのお言葉に、何回となくおしかりを頂いて悲しかったことも、いっぺんに吹き飛んでしまった思いなど次々と浮かんできて、なかなか寝つかれぬその夜でした。

❀❀❀❀

いよいよ八月より使用開始となり、ボツボツと個人の使用から始まりました。また成城大学の合奏団がちょうど小沢征爾氏のホール訪問時に当たりましたので、氏の指導を仰いで練習をすることが出来、これを早速「音楽之友」社で記事としてとりあげてくれました。さらに毎日新聞の群馬版では記者・勝亦氏によって「山小屋風の音楽堂完成」という大きな字の見出しで、写真も入れて半頁大の記事として載せて頂けました。これらのおかげで、広く多くの方々にホールの存在を知っていただくことが出来て、感謝なことでした。

ところが、この八室だけでは斎藤先生の指導されている桐朋のオーケストラには使用出来ないので、是非百五十人演奏可能なステージ型のホールが欲しい、と先生は盛んに申されました。しかし現状は、未だ第一期工事の借金も残っているという始末です。だが九月十八日の理事会で、同じ設計士にまた厚かましくもお願いしましょうという事に決定されたのです。このことを神さまは許して下さって、何んと地元建築士の植原氏は「手付も不要、ある時払いの催促なしで私にその仕事をさせて下さい。」と申されたのです。その心暖かさに甘えて、早速雪も降り始めた北軽井沢に打ち合わせの為に度々出掛け、遂に四月上旬には取りかかって頂き、七月中には完成させて頂けるとの約束をいただきました。

そこで私は今度こそ自分で駆け廻ることをやめて、ひたすら神に祈り求めました。「あなたのみ心でしたら必要なお金を与えて下さい……」と。それから暫くして、思いがけぬ大金五百万円が日本船舶振興会より寄付して頂けるようになりました。それは亀田夫人と小沢氏の御尊父の御尽力とによるものでした。こうして神は、建設の為にこのような方々を備えて下さった上に、個人からも思わぬ寄付が舞込み、植原氏にも余り迷惑を掛けなくて済むようになりました。この事は神の成せる業である、としみじみ解らされました。

植原氏もこの種の建築は初めてとのことで、大いにのり気になって下さり、利益を余り考えない奉仕の気持でして下さったのです。この〝大ホール〟と呼ぶものは鉄筋の柱を目立たぬように使用して、やはり山小屋風というイメージをこわさぬように、との希望をよく呑み込んで、真剣に取り組んで下さいました。

遂に五月八日の夕刻四時に棟上げとなり、午前中に電話の架設の為にとびまわって戻ってみますと、見事に鉄骨が組み立てられて、見上げるようなホールらしい物になっていました。ささやかな棟上げを済ませ、ほっとして帰京いたしました。その後、度々この現場に参りましたがその都度この〝大ホール〟の名称にふさわしい、堂々としたものになっていく姿を目の当たりに見させられました。

六月三十日にこの待望の大ホールは完成されたわけですが、ステージ型であるだけに反響の点では非常に苦心を要求されたのです。

さて、この大ホールに一番乗りしたグループは、主に在る花小金井キリスト教会の皆さんでした。梅雨時の雨降りの中を、アスキュー宣教師は身体の不自由な方々も引率して、この山のホールに来られて使用して下さったことは、涙の出る程の感激でした。そうしてこの大ホールから流れ出た、静かな美しい讃美歌が林の中を通り抜けて、遠くへ遠くへと吸い込まれて行くようでした。このような神の御計画の素晴らしさに、私は夢ではないかと疑いたい程の思いでした。

❀❀❀❀❀

昭和四十三年八月十四日は第二期工事完成祝いの日となりました。〝北軽井沢ミュージックホール〟の心臓部である〝大ホール〟が完成されましたので、いよいよ広く多方面の方々にい

らして頂き、斎藤先生の指導されている桐朋学園のオーケストラをお願いして、感謝の祝賀演奏会を催す事になりました。井口愛子先生は早速、この大ホールにふさわしいセミコンサートグランドピアノを寄贈して下さいました。

当日が晴天であることを祈りつつ、前日に準備の為私共はホールに参りました。ところが夕方から雨が降り出し、それは夜中まで続きましたが、一夜が明けますと薄雲は静かに去り行き、美しい青空が現われ、この日を祝してか陽が射し込んで来ました。

すっかり準備も出来、午後一時よりの祝賀のプログラムも黒々とはっきり書き上げられて貼られました。

いよいよオープンの幕が開かれ、田中は司会者となり、まず最初に斎藤先生が理事長として皆様に感謝の言葉をもって挨拶されました。また田中は常務理事として、今日迄の経過報告を、いつもになくすらすらと述べることが出来て感謝でした。次々と続いて県庁の方、役場の方、町の方の祝辞があり、また理事の亀田夫人、井口愛子先生よりもこの建設に協力して下さった方々に対しての厚い御礼の言葉が述べられました。多大な友情を持って協力して下さった国際婦人会・副会長の木下夫人からは暖かい私共へのねぎらいのお言葉を頂き、恐縮致しました。

また米国在住の河野俊達先生よりの祝電をはじめ、国内各地からの祝電が読まれ、そのどなたさまの祝辞にも、ただただ感激の涙で口も利けない程でした。じっと座して、思わず口から流れた詩のようなものを、一片の紙切れに走り書きしておりました。

うす雲は流れ去り
浅間山の雄大な姿も
この日を祝してか静かに現れはじめ
午後のひととき
この日を待ちわびたように
三三五五　老若男女の群が席を
うめつくす
ブナと白樺の林にこだまする交響曲
そして円舞曲に聴き入る

ああ　神の成せる業はかくも素晴しきかな

ブルックナーの交響曲四番「ロマンティック」が林の中にこだまして、北軽井沢の全山に響き渡ったとき、中庭に続々と集まる聴衆の群、斎藤先生が椅子からのり出して聴き入るその喜びの横顔は、今も目の奥に焼きついて、昨日の事のような、また遠い昔のような気がするのです。

プログラム通りに祝賀演奏が済み、この日の為に協力して下さった音楽学生のお母様方お手製のサンドウィッチの山が、お菓子や飲みものと共に中庭のテーブル幾つもに置かれ、喜びに湧き上がった大祝会となりました。

各新聞社の記者や音楽新聞記者、カメラマンの方々が群の間を右往左往し、テレビ局からも遙々取材に来られて、その夕刻のニュース番組で報道してくれたことを見た、という親戚、知人によって知らされました。これも一瞬にして宣伝されたということで感謝したのでした。

また西山氏はこの日の模様をすっかりテープにとって下さり、小野氏はカメラを持って屋根

に登ったり、大ホールの天井の周りを渡り歩いたりして、素晴らしい記念の日を写真に収めて下さったことは、今も忘れられない感謝なことです。

夕暮近くなり、三三五五連れだって皆帰り始め、ざわめく人々の声もいつしか消え去り、中庭にとり残されたテーブルを片付けながら、甚大な神の御愛がこの日を迎えさせて下さったことと、深き神のみ恵に感謝の涙が止めどもなく着物の袖をぬらしたのでした。

次の瞬間、この場を通して一人でも若者が神のみもとに帰り、神の栄光が現わされることを望む者が出てくれることを祈りました。そして思わず、讃美歌「主よ終りまで仕えまつらん」を口ずさみ、これからもただ主のみに頼って、この事業のため僕となって奉仕するなら、何も心配することはない、という確信を持つことが出来ました。

帰京してからの私の第一の仕事は、ホール各所の写真を入れたパンフレットを作ることでした。御使用下さる方の資格・心得・設備の紹介・使用料・ホール建設の趣旨と計画等を盛り込んで、美しいものを作ることに専念しました。この為には、小野氏が大層協力して下さり、各室内また演奏中の写真などを使用することが出来、いつも素人の私のデザインやアイディアにも何かとアドバイスを下さって、現在のような特色あるパンフレットになったのです。

音楽新聞は早速、「山の音楽堂が〝北軽井沢ミュージックホール〟という名称で完成！」と大きな見出しで報道してくれ、また一般新聞も月刊雑誌なども「日本で初めての大自然の中の音楽施設出現」、と汽車も通わぬ山の上に、このような物が建設された事を珍らしく思われたのでしょう。このおかげで、宣伝費を使わずに、関東一円は少なくとも宣伝して頂けた訳です。

この場所は、閑静な林の中でありながら、バスターミナルから徒歩で二、三分という地点に当たり、大きな楽器も自分で抱えて来られるという便利さもあって、誠に神の与え給うた場所であったことに気付かされ、「神の御計画は素晴らしい」の一言に尽きると思いました。

❀❀❀❀❀

さて、使用者側に立ってみますと、またここに一つの大きな問題があることに気付かされたのです。そこで次の計画が持ち上がりました。それは百人分の宿舎を建設する事です。早速、理事会で、第三期工事として宿舎を建設することに決定しました。息つく暇もない建設とは、この〝ホール〟のことでしょう。

此の度は冬に向かっての工事ですので、さて基礎工事という時は、雪の降り積った寒風吹きまくる気象状況でした。春合宿に間に合わせて上げましょうという、植原氏の好意によるものです。また、毎度の事ながら「ある時払いの催促無し」という彼の同情ある申し出に甘えて、お願いすることになりました。

この時にも、神は生きてお働き下さる愛のお方であることを、見させて頂けました。一メートル程雪の積った土地に溝が堀られ、基礎工事をして下さる工夫の姿を目の当たりに眺めたとき、「誰が為にこの寒い時に、このような仕事を喜んでして下さっているのか」と思わず涙が頬を流れるのをどうしようもなく、じっと棒立ちになって見入っていたのでした。

翌年、昭和四十四年四月三十日には、日光のよく当たる、二階建の百人分ベット数のある宿舎が、山の小町の中で一番高い建物として完成されたのです。また調理室も続いて増築されました。当時、私と娘はベッド用目隠しカーテン百枚を縫いまくりましたが、それも讃美歌を口ずさむことによって、頑張ることが出来ましたのは、本当に感謝なことでした。

その五月には、東大オーケストラ九十名が使用され、七月には農工大・女子美大の混声合唱団百名が使用して下さいました。八月には桐朋学園オーケストラ、また東大オーケストラとい

うように、百名以上の大グループが使用され、続々と使用の申し込みに事務局を訪れて下さる方が多くなり、目のまわる嬉しい忙がしさに、やっぱりこの宿舎があってこそ、完成といえるのだと思いました。だからこそ、一見無理と思われたこの建設も「よし」とされた神さまは、大胆にも、私共に建設の決心をさせて下さったのだと知らされ、いよいよ「神の御計画はくすしきかな」と主の聖名をほめたたえずには居られませんでした。そして「神と共に事を成すなら必ず成功する」の聖句が大きく浮び上がってきました。

夏だけ、と思われたこの施設は、春も時には秋も、また十二月迄も使用者の申し込みがあり、全く驚くばかりで、こんなにも昨今の日本は音楽演奏の勉強をする方が多くなったものか、と想像以上の使用者に、少なからずあわてずには居られませんでした。

これですっかり「完成されたのだ」と私共は一息つけると思いきや、ここでまた要求が出てきたのでした。

それは、百人余の人が同時に、食事をとれる大きな食事室が欲しいということでした。この為にはどうしても隣接地を手に入れなければならないのです。ところが、四十四年の春から二年間ということで、夫は再度の台湾勤務を命ぜられての留守中のこと。私独りきりでの事務局

の責任に、一時はどうなることかと胸が痛みかけました。しかし、「いつくしみ深き友なるイエスは、我らの弱きを知りて憐れむ」の讃美歌が口から流れ出て、いっぺんに心配は飛んでしまいました。そして勇気百倍とされた私は、土地購入の為の交渉に、雪降りしきる北軽井沢へと、ハンドルを握る手もしっかりと飛び出したのです。

それから幾度往復したか覚えていませんが、いつもいつも無事なドライヴということではありませんでした。チェーンを後車輪にだけ付けて、スノータイヤではない東京の車で、「主よ主よ」と口に唱えつつ、いよいよ北軽井沢への坂道にさしかかった頃は冬の日がとっぷりと暮れておりました。雪の坂道を一気に登り、ホールにはあと十分位という地点で、遂に左の前車輪をアッという間に溝の方へスルスルと落としかけてしまったのです。そしていくらバックしようとしても空回りで、ひどい排気ガスがあたりにプンプン。頑張れば頑張る程前にずれていくという具合で、必死の努力も空しく、全くお手挙げでした。次の瞬間、私はハンドルをしっかり握って、「主よ助けて下さい」と真剣そのもので哀願したのです。するとどうでしょう。前方から大きなトラックがチェーンの音をジャリジャリと大きくたてて、こちらに向って近ずいて来るではありませんか。今迄一台も車も通りはしなかったのです。私は早速、車から降り

て両手を挙げ、「助けて下さい」と道のまん中に立ったのです。忽ち止まってくれて、大男四人がピョンピョンと車から跳び降りて、「東京の人かね」と声をかけてくれながら、私の傾いている車の傍に来てくれました。

ああ、その時の嬉しさは天にも昇る心地でした。そして「前車輪はチェーンを付けていないものですから……、大丈夫でしょうか？」と男の人達の顔を覗くようにして聞いてみました。男達は大した事もないような顔で、二人は溝に降り、もう二人が引っ張って、掛け声もろ共に、スルスルと道のまん中に車が出て来ました。私は「有難うございます。本当に助かりました」とお礼のお金を差し出しました。しかしどうしても受け取ってくれないで、「お互い様さ、運転する者同志だ」とさっさと車に跳び乗り、「気をつけて行きな。もうこの道を通る車なんてないぜ」と私のこの先の運転を心配してくれたのでした。これこそ神の与え給うた助け手でなくて、何んでありましょう。私は深々と頭を下げて、そうして運転席に戻り、「神さま有難うございます。主よ、あなたが私の隣りに座っていて下さるのですね。やっぱりそうなのですね」と主に語りかけ、困ったとき、必ずお助け下さる〝生ける神さま〟ということの確信をさらに持たされました。

そして主の聖名をあがめつつ、注意深くハンドルを握り、無事にホールに着くことが出来ました。

❀❀❀❀❀❀❀

さて、土地を譲って下さる方の所へ、管埋人の石黒氏と共に伺うことになりました。

全く所持金もなく、土地を譲って欲しいというのですから、話しがうまく進むかどうか、大層懸念しつつも「実は、咽から手が出る程、あの土地を欲しいのですが、現金が全くなくて……。それで、田中の定期預金通帳が二冊あります。そして実印もここに持って来ました。これを全部お預けしますので、土地の登記をして頂けませんか」と真心こめて、心の内では「主よ、助けて下さい」と祈りつつ、お願いしてみました。するとその老地主は、もともと暖かい人のようでして、暫く考え込んで居られましたが、「田中さんはクリスチャンだと聞いているから、ずるい事はしなかんべ。一応、これを預って、登記をして上げましょう」と申されました。

そのとき、実は急の事とて、台湾の夫に相談する暇が無かったので、独断でしてしまったことだけに、今度は神さまが「よし」と許されるかどうかを心配して、息を呑んで返事を待って居りましたから、思わず胸をなで降ろしました。そして、「神もし味方なら…」の聖句を思い浮かべて、感謝で胸がいっぱいとなりました。

ところが、翌日にまた一つの難題のある事を知らされました。

それは、牧場という地名を山林という地名に、部落長にお願いして、変更を承諾して印を頂かないと、建物を建てられぬというのです。まさに、一難去ってまた一難とは、つくずくこの事だと思いましたが、兎に角、今回すべてを完了して帰京したいと思いましたので、その部落長の家に行く事になりました。

そこは低い畑の中にあるとのことで、道は舗装されて居らず、雪の日のこととて、車輪が埋まってしまう恐れがあるから、またの日にしては、と地主の方にも止められたのですが、三月一杯に土地の事が完了しませんと、船舶振興会から、また寄付をして頂けるように亀田夫人がお願いして下さったことが、駄目になってしまうのでした。

是が非でもこの度、完全に登記迄済ませて帰京しなければならない、という重大責任が私に

あったのです。

和服で草履という格好で、その田圃道を車で行くというのですから、誰も驚きあきれたのも当然でしょう。それで電話では、途中エンコするかも知れないが、兎に角伺うという旨を知らせて、地主と共に車に乗り込み、私はハンドルを胸にかかえて、一心に神に祈りました。すると、大丈夫という確信が与えられました。それはこのときも、隣りに主が座り給うて下さる、と信ずることが出来たからなのです。エンジンの音は、さながら励ましの声のように思えて、前方をじっと見つめてハンドルを握りました。暫く行きますと、そのうち右上りの土手道になり、危険にさらされつつ冷や汗を出しながら、「転倒したら、それこそこの親切な地主のおじいさんもろ共に、でんぐり返しになってしまう」と思い、「主よ、助けて下さい」と祈りつつ、遂にそこを無事に通り抜けさせられました。

このドライヴの一刻々々を、主が守って下さらなかったら、どうして無事に目的の家に着けたでしょう。心配して、部落長が外に出て来てくれて、私がその危険な道の話を致しますと、他に安全な道があったのに、と申されました。しかし、主はどちらの道を通っても、守って下さることに変わりはないのですし、かえって危険な中で、生ける神の存在をいよいよはっきり、

信じることが出来て、感謝でした。

部落長の家に入りますと、早速おいしい濃い、しぼりたてのあつあつ牛乳を呑ませて下さり、そのときのおいしかった味は、今も忘れられません。そして「そんな危険をおかして来たのだから」と文句なしに、書類に印を押してくれて、地目変更は出来、従って登記も出来ることになり、土地購入の件についての手続きは全て完了して、身も心も軽く、帰京することが出来ました。

数日後、早速、船舶振興会へ寄付金のお願いの手続きに参りましたが、不備の点を指摘され、再三の嘆願と、亀田夫妻の暖かい好意により、八百万円のお金が寄付されたのでした。

また現地に向い、植原氏に建築のお願いに参りましたら、「残金はあるとき払いの……」とお決まりの暖かい契約をして頂け、草速建築にとりかかってくれました。

六月二十八日に、食事室兼小ホールと分奏室（F・G室）、個人レッスン館（H）が、やっと購入した隣接地に建てられました。それは、ちょうど山つつじが美しく咲き乱れ、初夏の若緑の木々の葉が、渋い栗色の建物と和して、正に〝山の音楽堂〟そのものの姿でした。ああ、神の成せる業は、かくも素晴らしきかな。こうして〝北軽井沢ミュージックホール〟は完成さ

れたのです。

❀❀❀❀❀❀❀

さて、使用期間中におきまして、最大の問題点となるのは、やはり三度の食事問題であります。

ここは、夏の二ケ月間びっしりと、春秋の単発的な使用ということで、常時、専門に食事責任者を置く必要もなく、また安価な使用料ということが、このホール設立主旨の一つですから、無駄な経費はかけられないのです。そうかといって、必要なときだけコックさんを、ということも不可能で、従って自炊ということになっているのです。

楽器を練習する学生というものは、頭の中も身体も重労働をするので、栄養あるものを量的にもたっぷり食べませんと、充分な練習が出来ないのです。そこで初め、管埋人の石黒さんが幼児二人を抱える身で、学生の食事の手伝いをしてくれていましたが、増築されると共に使用者も増し、用事も多く、無埋ということになりましたので、昭和四十七年から、青木ゆきさん

という働き者の婦人を管理人に迎え入れることになりました。そして、食事関係は私が責任者となって、学生さんの自炊に奉仕することとなりました。

主が共に居まして、必ず助けて下さることを信じておりましたので、夏の二ケ月連続して、百人余の食事を一日三度用意することにも、何んら憶する気持はありませんでした。

勿論、買出しも、調理の仕方も、味付けも教えて上げなければならない音楽学生ですから、初めはお米のとぎ方、みそ汁の作り方、トンカツの衣付け、揚げ方、と料理のことでは子供のような学生さんを相手の調理室は、食器を落とすやら、果ては指先迄落としそうになっての悲鳴、と正に〝キチンオーケストラ〟と名付けたのも、どんぴしゃりのようです。けれども二、三日も過ぎると、楽器で鍛えられただけあって、キャベツの千切りなども見事な出来ばえ。若い、ということは素晴らしいと思いました。

ところで、この調理室に、私は〝心得〟なるものを貼ることに気付かされました。それは、「お互いに、相手の失敗を決してとがめないで、どんなときにも『私が悪いのです』と言い合い、愛を持って助け合いましょう」という文です。

今年十周年を迎える迄、〝キチンオーケストラ〟のメンバーは年々変わっても、何のトラブ

ルもなく、楽しい、和気あいあいの歌声が絶えないのです。このような〝オーケストラ〟の指揮をさせて頂ける我が身の幸を、主に感謝申し上げて居ります。

そして、規模が大きくなるにつれて、「収支決算書」を県庁に報告する事務局としての経理の仕事も、複雑となって来ましたが、神は、植木氏という公認会計士の方を、無能な私の為に備えて下さって、親切に教えて頂けましたことは、何んと有難いことだったでしょう。その上、同氏は是非とも欲しかった指揮者用の大型鏡と、毛布二百枚を寄贈して下さったのです。

本当に、神さまはいつも私共の必要なもの何んでも与えて下さるお方で、ただただひたすら祈り求めたとき、不可能も可能にして下さるということを、はっきりと体験させて頂き、「生ける神」「愛の神」「富み給う神」「全智全能の神」でいらせられることを、よくよく知らされたのであります。

あとがき

この度、ここに述べさせて頂きましたものは、一九七〇年頃から折り折りに書き留めておきましたものを、まとめたものです。この十年の歩みは、ただただ神が、力無き、名も無き、一主婦への憐れみによるものでありましたこと、と解らされまして、深く神に感謝申し上げて居る者でございます。

神の栄光がこの場にあって、あらわされますように。主の聖名がほめたたえられますように。

一九七七年　五月　　田　中　テ　ル